

パート3 日常への冒険

地下1階展示室

Part 3: Adventures in the Every Day

Exhibition Gallery B1F

ロモグラフィー
LOMOGRAPHY
(1992年結成、オーストリアはじめ世界各地)
「ロモグラフィって一体何？
力強さー刺激ー熱狂ー巨大ーユニークー新鮮ー分解ー魅惑！
*What the hell is Lomography?
Powerful/intense/Crazy/Tremendous/Unique-Raw-Exciting-Sexy*



セカンドプラネット
Second Planet
(1995年結成、アーティスト・ユニット、日本)
「注目が集まった風景を再発見し、
異なる出来事の間に関係を
別の文脈を探り出したい。」
"I wish to rediscover landscapes others have found,
exploring new relationships between dissimilar events
as well as separate contexts."

ここでは写真表現や美術の領域にとどまらず、広く文化や生活という領域の中で、「写真」を考えていきます。写真は専門技術であるよりも、感性・感覚の延長として、コミュニケーション・ツールや視覚的な記号として、人々の日常の世界を、時には豊かに意味づけ、時には無意識のうちに制約しています。出品作家にはいわゆる「写真家」が一人もいません。狭義の「写真」の専門性の外側において、「表現」や「作品」を意識せず、一見遊びのような好奇心の向くま目の前の世界に目を向け、人とコミュニケーションしていく。写真を「ツール」にして、今ここにある日常を冒険に変える可能性は未だあるはず。

This part of the exhibition considers photography beyond the realms of photographic style and art, in the broader realms of culture and daily life. Photography is becoming less a specialized skill than, as an extension of the senses, a communication tool and visual symbol, sometimes adding richness to individuals' everyday worlds and sometimes unconsciously restricting it. None of the artists whose work is included in this part of the exhibition self-identify as "photographers." They are not specialists in photography in the narrow sense and are unconscious of issues such as style and finished works of art; they allow their curiosity free rein, to direct their eyes to the world before them and communicate with others in a manner that appears, at least at first glance, playful. Photography still has great scope as a tool for transforming quotidian everyday life into an adventure.



みうらじゅん
Jun Miura
(1958年生まれ、日本)

「いい写真が撮りたかったわけじゃないんだ。
見つけたアイが、どれほど素敵かって、紹介したかったんだ。」
"I wasn't trying to take great photographs.
I just wanted to show how wonderful the love I had discovered was."

*掲載されている作品図説は、出展作家と異なる場合があります。

私のいる場所

新進作家展 vol.4 ゼロ年代の写真論

2006年3月11日(土) - 4月23日(日)
3階展示室(パート1)/2階展示室(パート2)/地下1階展示室(パート3)

[3会場共通観覧料]
一般 1200(960)円 / 学生 1000(800)円 / 中高生・65歳以上 800(640)円

[1会場共通観覧料]
一般 500(400)円 / 学生 400(320)円 / 中高生・65歳以上 250(200)円

10:00-18:00(木・金曜日は20:00まで) 入場料は開館時間の30分前まで 月曜休館

主催：財団法人 東京都歴史文化財団/東京都写真美術館
Organized by Tokyo Metropolitan Museum of Photography/ Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

助成：財団法人 地域創造
With grant from The Japan Foundation for Regional Art Activities

後援：オーストリア大使館、オランダ王国大使館、駐日韓国大使館、韓国文化院、ハンガリー大使館、
フィンランドセンター、フランス大使館、ベルギー王国大使館

Officially Supported by the Austrian Embassy, the Embassy of the Republic of Belgium, the Finnish Institute in Japan,
the Embassy of France, the Embassy of the Republic of Hungary, Korean Culture Center and the Netherlands Embassy

作品制作技術協力：キヤノン株式会社
Production and technical support from Canon Inc.

協力：堀内カラー、日本カメラ社
With Support from Horichi Color and Nikon Camera

With cooperation from Contiblogi, Hippolyte Photographic Gallery, Nani Marcella, Kenji Taki Gallery, Magnum Photos Tokyo,
Mai Maro House, Plan deux and Yumiko Chiba and Associates.

関連事業

出展作家によるカフェトーク+ギャラリーツアー

(詳細はHPでご確認ください)



■当館には専用の駐車場はございません。
お車でのご来館の際は近隣の駐車場をご利用ください。

■京橋比寿町駅東口より徒歩7分
東京メトロ日比谷線比寿町駅より徒歩10分

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3
恵比寿ガーデンプレイス内
TEL 03(3280)0099
http://www.syabi.com



Jean-Paul Brohez-Contretype

私のいる場所

新進作家展 vol.4 ゼロ年代の写真論
2006年3月11日(土) - 4月23日(日)

東京都写真美術館

http://www.syabi.com

Absolutely Private :
On Photography from 2000 to the Present



宝くじは
豊かさ築く
チカラ持ち。

宝くじは、広く社会に
役立てられています。

私のいる場所

新進作家展 vol.4 ゼロ年代の写真論

東京都写真美術館では2002年から、写真表現の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、写真愛好者やひろく一般層に向けて、現代の写真映像文化を紹介することを目的とした[日本の新進作家展]を立ち上げ、毎年、新進気鋭の作家によるグループ展を開催しています。

これまでに「風景」「幸福」「花」といった普遍的なテーマに基づいて、現代写真家や写真というメディアを用いる現代美術作家を紹介してきましたが、開館10周年を迎えた今回の新進作家展は、「私性(プライベート)」を全体テーマとして、現代の写真表現をこれまでより多様な観点から検証します。現代写真や現代美術、またハイカルチャーやサブカルチャーといった複数の文化領域に分化・棲み分けされた現在のシーンを連続したものと捉え、その状況をゼロ年代(西暦2000年以降)の写真論として提示する試みは、日本および海外で、2000年以降に頭角をあらわしてきた新進作家のうち、7カ国から15作家/グループを取り上げ、写真・映像の新たな可能性や価値観を問いかけようとするものです。

パート1 私のなかの私

3階展示室

Part 1: Myself Within Me

Exhibition Gallery 3F

「自分自身を描くこと」は、その時代を生きた彼らの存在証明として、有史以来アーティストたちにとってもっとも重要なテーマでした。そして現在に至るまで、アーティストたちはそれぞれ「現在」を探り、描き出す作業を続けています。それは穏やかな家族との生活であり、日々更新される日記のようなものであり、またみずから映し出す鏡としての記憶をたどる旅だとも言えるでしょう。わたしたちは、彼らの作品をとおして、日頃見失いがちな日常の断片やその重なりの意味を新たに気づかされるにちがひありません。

Depicting themselves, as evidence of their presence in the specific settings of their lives, has been an important theme for artists since the dawn of history. Today, artists continue to explore and depict their present/presence. Such work may resemble a diary of peaceful family life or a journey through memory's mirror. Viewing these works, visitors will make their own discoveries of the fragments of the everyday so easily overlooked and their accumulated significance.

ジャン＝ポール・ブロヘズ
Jean-Paul Brohez
(1959年生まれ、ベルギー)

「世界の一部であること、生きていること、
見ること。そしてその感情をわかちあうこと」
"For me, the joy of photography lies in the fact of being present,
being part of the world, of being alive,
of seeing and sharing the emotions it begets."



アントワーン・ダガタ
Antoine d'Agata
(1961年生まれ、フランス)

「どのように撮るかは問題ではない。むしろなぜ撮るかのだ」
"I don't care how people photograph, I care why they photograph."



エリナ・ブロテルス
Eriina Brotherus
(1972年生まれ、フィンランド)

「毎日の出来事ほど
美しいことはない。
なぜなら、私たちのまわりは
美にあふれているからだ」
"I enjoy small, every things;
that I want to stand
to discover beauty from close to."



塩田 千寿
Chiharu Shiota
(1972年生まれ、日本)

「私の記憶はどこからくるのか。
DNAからDNAへ、
その記憶を録みたい」
"Where do my memories come from?
From DNA to DNA,
I want to test that dialogue"



アンニ・エミリア・レップアラ
Anni Emilia Leppala
(1991年生まれ、フィンランド)

「私にとって写真は、
曖昧模様な瞬間の光を、
目に覚えるかたちに
することである」
"In my pictures, attempts in recognizing and
lighting of obscure and vague movements,
are made visible."

パート2 社会のなかの私

2階展示室

Part 2: Myself in Society

Exhibition Gallery 2F

デジタルの時代を迎え、インターネットの普及ともなつて私性>はいとも容易に公開されると同時に、ときには意図しないところで暴露するという問題を抱えています。また、<私性>が広く流布されていく一方で、匿名性の高い、あるいはごく限られた人々との結びつきにのみこだわる、いわゆる個人の「セル化」も顕著に見られるようになってきました。いかに個人的なテーマを普遍的なテーマへと置き換えていけるのか、それこそがこの時代に生きるわたしたちにとってもっとも現代的なテーマだと言えるでしょう。



ニコール・トラン・バ・ヴァン
Nicole Tran Ba Vang
(1963年生まれ、フランス)

「ヌードは決して裸ではない。
わたしたちは常に身体という衣装をまとっている」
"Nude is never naked.
We always are covered with the clothing of our bodies."

With the arrival of the digital age and the penetration of the internet, making the self public has become extremely easy and the ease of making unintended self-revelations has also become an issue. Moreover, while much that is personal is widely distributed, a countervailing tendency to be fixated on making about highly anonymous connections or connecting only with a highly restricted set of people—a phenomenon had been labeled "cell formation" by the individual—has also emerged. How to replace personal themes with eternal themes—that indeed is the most "contemporary" theme for all of us alive today.



ジャクリーヌ・ハシンク
Jacqueline Hassink
(1966年生まれ、オランダ)

「個人のマグカップを撮ることで、
私は会社というものを地図化したかった」
"I wanted to map, or portray, a corporation
by photographing the personal coffee cup of each employee."



原 美樹子
Mikiko Hara
(1967年生まれ、日本)

「見なければいけないと思う気持ちと、
見てはいけないという気持ちが
同時にはげしくせめぎあっていた」
"The feelings that I must look and
must not look instantly struggle with each other."



姜 愛蘭
Airan Kang
(1960年生まれ、韓国)

「(本)は自己の
アイデンティティを象徴するものです」
"Books symbolize my identity."



サローラ・シャロルタ
Sarolta Szabo
(1975年生まれ、ハンガリー)

「孤立と匿名性の恐怖は、
大都市の集合住宅に住む人々の都市生活につきものである」
"The fear of isolation and facelessness are all the concomitants of the life in the city
that people dwelling in big cities or house states have to live with."



池田 昌紀
Masanori Ikeda
(1978年生まれ、日本)

「記念撮影のスタイルを創る。
それが一番のねらいである」
"To create a commemorative photograph style:
that is my primary objective."